

はじめにかえて——わたしが川上小学校にたどりつくまで……………7

序章 学校給食の教育的意義を問い直す……………12

1 「食べること」と「学ぶこと」がかさなる学校給食……………12

2 問題の所在……………14

3 本書の構成……………16

第I部

教育として位置付く日本の学校給食

第1章 日本における給食の歴史……………22

1 救済期——苦境にある子どもたちのための給食 1889～1953年……………22

2 一般化期——ほとんどの子どもたちが給食を享受 1954～1975年……………28

3 高品質化期——複雑化する子どもの食の危機に対応する 1976～2004年……………29

4 食育期——給食を通じて子どもたちに食育を 2005～2019年……………32

5 2020年以降の学校給食……………34

| | | |
|----------------------------|---|----|
| 第2章 | 日本の給食・食教育に関する用語解説…………… | 40 |
| 1 | 学校給食…………… | 40 |
| 2 | 給食教育…………… | 42 |
| 3 | 食育…………… | 43 |
| 4 | 食教育…………… | 45 |
| 5 | 食に関する指導…………… | 46 |
| 6 | 給食指導…………… | 47 |
| 7 | 学校栄養士（学校栄養職員、栄養教諭）…………… | 47 |
| 第3章 | 学校教育における給食の位置付けと変遷…………… | 50 |
| 1 | 教育の目的「人格の完成」…………… | 50 |
| 2 | 学校給食の目標・ねらい…………… | 58 |
| 第4章 | 学校給食と「子どもの学び」…………… | 70 |
| 第Ⅱ部 | | |
| 川上小学校の「給食教育」で子どもたちは何を学んだのか | | |
| 第5章 | 本研究の検討方法について…………… | 74 |
| 1 | 川上小学校の給食に関する先行研究…………… | 74 |
| 2 | 本研究の目的…………… | 77 |
| 3 | 調査方法…………… | 78 |
| 4 | 分析の視点…………… | 79 |
| 5 | 倫理的配慮…………… | 81 |
| 第6章 | 川上小学校の給食の変遷 ——地域に根ざした米飯給食として著名な存在…………… | 83 |
| 1 | 川上地域の環境と歩み…………… | 83 |
| 2 | 味噌汁給食期（戦前～1961年頃）…………… | 88 |
| 3 | 弁当米飯給食期（1961～1976年）…………… | 90 |
| 4 | 川上給食教育期（1976～1987年）…………… | 91 |

第7章 インタビューより①——給食婦・さつちゃんを中心とした「給食教育」……………94

- 1 「さつちゃん」と親しまれた安達幸子さん……………94
- 2 川上小学校のおいしい給食……………95

(1) 厳選された食材 (2) 栄養バランスと教育活動と食材の旬が考えられた献立 (3) 手間を惜しまない

- 3 川上給食教育の様相……………99

(1) 川上小給食のはじまり (2) 食堂「ランチルーム」・米飯給食の開始 (3) 持ち寄り給食・旬の献立
(4) 集団教育 (5) 労働教育 (6) 保護者や地域住民との協働

- 4 さつちゃんと「良いペア」の福井さん——忘れたら著作る実践——……………112

- 5 川上給食の教育方針とは……………116

第8章 インタビューより②——川上小学校教頭・渋谷忠男が創造したもの……………124

- 1 渋谷忠男が創造する教職員集団とは……………124

誰が読んでもわかる教育目標……………126

- 3 川上地域生活実態調査運動を通じて地域集団を動かす……………134

地域の課題を学校が教育課題として引き受ける……………142

- 5 「勉強せんと百姓せんなんど」と労働教育……………153

学校にいるすべての大人が教育者である……………157

第9章 インタビューより③——卒業生の記憶……………162

- 1 卒業生へのインタビュー調査とそのデザイン……………162

インタビュー調査の方法……………167

- 3 インタビューデータ分析の視点……………168

分析手順1 テクスト生成……………170

- 5 分析手順2 アイデア会議「給食ストーリー」生成……………172

分析手順3 アイデア会議「全体の結果生成」……………173

- 7 倫理的配慮……………175

卒業生それぞれの給食ストーリー……………175

(1) いちた(A)さんストーリー (2) ふゆみ(B)さんストーリー (3) さいすけ(C)さんストーリー

(4) ようこ(D)さんストーリー (5) ごろう(E)さんストーリー (6) むつえ(F)さんストーリー

- 9 給食について覚えていること……………188

(1) 給食の印象 (2) 食堂「ランチルーム」・給食室・異学年合同班(縦割り班、チーム給食)について

(3) 給食のメニュー、好きなもの・苦手なもの等 (4) 残食 (5) 作り手のこと

- 10 給食教育——労働教育に関連した話……………220

(1) 農園作業 (2) 自然野草の採取 (3) 給食当番 (4) 著作り (5) 持ち寄り食材

- 11 川上給食教育における子どもたちと大人たちとの関係……………243
- (1) 横並びの関係になる給食時間 (2) 感謝・尊敬の気持ちが生まれる
(3) 先生は「おもしろい」 (4) 「おじいちゃんおばあちゃん」は貴重な存在

第10章 川上小学校の「給食教育」における学び……………264

- 1 楽しい思い出として覚えている……………264
- 2 子どもに応じて引き出された給食教育における「学び」……………266
- 3 人と人との関係を育む……………268

終章 子どもの学びを大切にしている学校給食の未来……………272

- 1 子どもの学びからみる学校給食の教育的意義とは……………272
- (1) 学校給食の教育的意義 (2) 教育的意義3つの位置関係
- 2 これからの給食を通じた教育活動に向けて——実践の内容を真似する必要はない……………279
- (1) 川上小学校の給食教育におけるエピソードの解釈 (2) 本研究から導き出される仮説

おわりにかえて——給食をめぐるわたしの記憶から……………283

はじめにかえて——わたしが川上小学校にたどりつくまで

まず、本研究を始めたきっかけを述べておきたい。

私は2016年頃、大学の客員研究員として公衆栄養学（学校や地域などの集団を対象とした栄養学）の研究室に籍を置き、「学校給食」について検討を始めていた。たとえば、栄養バランスに優れた給食献立のパターンにはどのようなものがあるか、などである。ただし、公衆栄養学的に意義のある研究とするためには、栄養バランスの優れた献立パターンや献立作成方法を検討するだけでなく、実際に子どもたちがそのような優れた献立の給食を食べて、健康になるのかどうかまで検証しなければならぬ。長い道のりになりそうだが、学校栄養士として献立をたてた経験のある私にとっては、大変興味深くやり甲斐のあるテーマであった。その過程で、あることに気づいた。

一定以上の年齢の人と給食の思い出話で盛り上がると、「いつもコッペパンだった」「脱脂粉乳だった」ということに始まり、1980年代生まれの私とはまったく違う（私にとっては「風変わり」だとすら思える）、給食のエピソードが語られる。それについて、当初は「昔の給食は、私の頃のとはずいぶん違う」としか思っていなかった。だが、研究の過程で給食の歴史を遡るうち、

1954年に学校給食法が成立して以降、1976年に米を主食とする米飯給食が正式に認められるまで「パン給食が基本とされていた」という事実に行きあたった。

子どもたちの毎日のお昼ご飯の主食が「パン」であったのか「米」であったのかという事実は、栄養の検討をする際には重要な違いとなる。パンと米、どちらを主食とするかによつて、1食当たりの栄養バランスは、必然的に変わってくる可能性があるからである。

パンは米と比べて脂質が多く含まれている。また、味の相性や食文化的観点からもパンに合うおかずはハンバーグやシチューなどの洋風の料理が多く、それらの料理は和食よりも脂質が多くなる傾向がある。その代わりに、たんぱく質が十分に摂取できる献立が多いこと、和食の献立では不足しがちな栄養素が補えることなどの利点もある。

では、かつては本場に日本全国どこもかしこもパン給食だったのだろうか。さらに調査を進める中で、このような記述を見つけた。

当初から「ごはん給食」を実施した米どころの千葉県松尾町や京都市府久美浜町などがあります。(中略)

これらの地域では、農民の自主的な要求で、農業を守り子どもを守る給食が実施されました。京都市府久美浜町の川上小学校ではこの当時から(中略)食と農と教育を結ぶ学校給食の実践を行なっています。

〔雨宮正子(1992)『学校給食』より〕

ここから、「当初」全国どこもかしこもパン給食であった中で、千葉県松尾町と京都市府久美浜町の川上小学校だけは「ごはん給食」を実施していたと理解できる。それだけでなく、川上小学校においては「食と農と教育を結ぶ学校給食の実践」があつたと書かれており、ますます興味深い。川上小学校ではなぜパン給食を実施しなかつたのか、その理由を調べたいと思い、京丹後市教育委員会にメールで問い合わせた。

すると、「川上小学校で米飯給食が始まったのは昭和51年だと聞いております。」の一文と共に、当時の調理員さんにお話を聞くことができるとお返事をもらえた。昭和51年は1976年、つまりは日本で正式に米飯給食が導入された年である。となると、やはり、1976年以前はどこもかしこもパン給食だったのだろうか。ひとまず、調査に赴くこととした。

しかし、さらに連絡を取り合ううちに、考えもしない展開となつていく。「調理員をされた方が、当時、教頭、教諭をされていた方に声をかけてくださいまして一緒に話を聞かせていただくことになりました」とメールが届き、インタビュイーに、当時の調理員さんだけでなく、当時の担任教諭、当時の教頭先生までもが参加すると言ふのだ。どのような給食を作っていたのかや、ごはん給食への思い、食材調達の方法などを聞こうと思つていたが、当時の「先生方」に、私は何を尋ねればよいのだろうか、せっかくなお越しいただくのにもよな質問がないと失礼になる……と、大慌てで研究説明のプレゼンテーションや追加の質問を用意した。この時すでに、「どうしよう、教育がご専門の先生方に何をお尋ねしよう」と悩む私と、「給食のことなら、先生

たちを抜きには話せない」と考えていた当時の調理員さんとの間で、学校給食が何であるかの根本的な理解の違いがあったのだ。

2016年10月24日インタビュ当日、案内されたのは元教頭・渋谷忠男先生のご自宅だった。久しぶりに集まったという皆さんが親しげに談笑され、渋谷先生のご自宅リビングからは悠々たる佳景が望める。そこには、おいしいお茶とお茶菓子がならんだ。外部研究者である私も温かく迎え入れていただき、なんだかとても居心地が良い……と感じる中で、インタビュを始めた。インタビュの内容は第Ⅱ部で詳しく紹介するが、このインタビュが私の研究人生における決定的な「とき」になる。それはまさに、学校給食研究の土台が栄養学から教育学へと転換する「とき」であったのだ。

本研究は、「栄養学としての給食」から出発した一人の研究者が、「教育学としての給食」へと思いをあらため、深めた道筋でもある。このように書くと、栄養学を軽視しているように聞こえるかもしれない。だが、決してそうではない。栄養学で明らかにされた科学的事実はとても重要で、最後にはその根拠ある事実こそが人の命を救う。私たちはその価値を「江戸わずらい（脚気）」の歴史から重々学んでいるはずだ。脚気の原因が米ぬかに含まれるビタミンB1欠乏であると言われるまで、季節や職業、社会階層によって罹患しやすさが違つたこの病気は、「江戸」「米食」「階層」「病原菌」などに関するあらゆる憶測と偏見を生んだであろうし、実際に多くの命が失われた。まさか精米することで失われた栄養素が原因であるとは。私たちは身近な食につい

て、その健康との関係を正しく知る必要がある。

ただし、「学校給食」は、子どもたちにとって日々の食事の場であると同時に、教育の場でもある。病院のように、治療や訓練を目的とする場ではないのだ。「どのようにして、どのような方向へ、子どもたちを育む」のか。「学校給食」という場で、これを考えるために、教育学が必要なのである。

栄養学も教育学も、子どもたちの幸せと健やかな育ちを指すものであり、勝手かもしれないが私は、両者は相性の良い学問だと考えている。

本書は「教育としての給食とはいったい何だろうか？」という、私なりの「給食の本質」に立ち戻って考え、調査し、走り回った、一研究者の苦闘の記録として読んでいただければ幸いである。そして、小学校の先生や栄養教諭はもちろんのこと、「給食指導」というものや学校給食の在り方に疑問をもつ、学校現場の方々や保護者の皆さん（おじいちゃん・おばあちゃんを含む）にこそ、本書を手にとっていただき、自分なりの「給食論」を考えるきっかけにいただければ幸いである。

註

*1 雨宮正子（1992）、学校給食、新日本出版社、61-62頁。

*2 ウォルター・グラットザー著・水上茂樹訳（2008）、栄養学の歴史、講談社、62頁。

序章 学校給食の教育的意義を問い直す

1 「食べること」と「学ぶこと」がかさなる学校給食

日本の学校給食は、すべての子どもに十分な食事を提供するためのシステムとして着実に進歩してきた。子どもたちが家庭では十分に摂取できていない栄養素を学校給食は補う役割を担うだけでなく、家庭の状況等によつて子どもの間で日常的に生じている栄養格差を是正していたことがわかつている。他国と比べて日本は肥満児の割合が低く、栄養バランスがよく検討され管理されている学校給食が子どもたちの健康に寄与している可能性があるのではないかと言われている。このように日本の給食は、栄養政策として、十分に高く評価されるべきところにある。

栄養政策として成功しながらその一方で、「教育の一環として」実施されるものとしたのが日本の学校給食の特徴でもある。2005年4月1日には栄養教諭制度が開始され、小学校に「給食の先生」とも言える栄養教諭が配置されるようになった。同年6月17日に公布された食育基本

法を根拠とした食育が重要であるとされ、給食を「教材として活用」した教科活動等の実施がもとめられるようになり、給食の手引には具体的な授業例が紹介されている。日本の学校給食は、教育としての役割が果たされるように環境を整えられてきた。

そのような中でなぜ、給食の教育的意義が問題となるのだろうか。いまさら何を問い直さなければならぬというのか。実は食事の時間を通じて教育という特殊な状況について、その方法や内容、実践理論はこれまで十分に議論・検討されてこなかった。そして何よりも、学側としての子どもの事実がほとんど明らかにされていないことは問題であると言える。実際に日本では、給食指導におけるネガティブな出来事も多く発生している。高澤・小林(2019)は不適切な指導でPTSDとなつてしまった事例を紹介しており、新村(1983)はそのような状況について「食の私事性という人権の侵害となりませぬ」と述べている。理想的な食習慣や給食の背景にある自然や作り手について、給食を通じて教えてあげたい、食に関する知識だけでなく判断力もつけてほしい、そういった願いは学校給食法の給食目標に掲げられており、教員もそれを目指すことは心得ている。しかし、どのような給食実践によつてそれらが達成されるのか、また、本当に子どもたちは食事の時間を通じた教育によつてそれらを学ぶのか、そういったことが十分に議論されてこなかったのである。

学校給食の時間は、子どもたちにとつて「食べる」時間でありながら、「学ぶ」時間であると位置づけられている。「食べること」と「学ぶこと」が、かさなる時間である。

2 問題の所在

「食べること」と「学ぶこと」がかさなる場としての学校給食をみると、これまでの学校給食研究には次の3つの問題があると言える。

(ア) 給食の指導理論が十分に検討されていない。

日本の学校給食は教育に位置付けられる。「食に関する指導の手引——第二次改訂版」においては、給食時間中に行われる指導を「給食指導（配膳方法や食事マナー等の指導）」と「食に関する指導（献立を通じた産地・栄養等を学習させるなど、献立を教材とした指導）」の2つに分けて示し、箸の持ち方や食器の位置、献立を通じた食品の産地や栄養的な学びを指導することと明確に示している^{*11}。それにもかかわらず、実際には教員養成課程の教育実習関連科目において給食や給食指導は十分に扱われていないことを鈴木（2017）^{*13}は指摘している。そのため、給食指導方法は教員によって違うことが、原・河村ら（2014）^{*14}の調査で明らかにされている。新保ら（2017）の調査によると、教員が給食指導の参考に行っているのは「自分自身が家庭で受けた教育（59・6%）」が最も多くなっており、筆者ら（2021）の調査でも「身近な教員」「学校栄養士」など職場に依る回答が多く、指導理論を教授される場であるはずの「会議・研修」「大学」をもとに指導を

行う教員は少数であった^{*16}。このような指導理論不在の状態が、「食の私事性という人権の侵害」^{*17}となり、子どもを不幸にさせてしまう不適切な指導を生じさせる原因にもなっている^{*18}。給食指導理論の検討は給食研究における急務である。

(イ) 給食に求められる教育効果が、実際の給食時間等を通じたどのような実践でどのように達成されるのかが十分に検討されていない。

学校給食法には、7つの教育目標が掲げられている。しかし、それらの教育効果がどのような教育実践によってどのように達成されるのか、これまで十分に検討されてこなかった。学校給食は教育に位置付くとされながらも、これまで「食べること」ばかりに注目が集まり、「学ぶこと」としての給食がどのようにあるべきかが十分に認識されてこなかったためである。研究におけるこのような認識・検討の不十分さが給食指導理論の不在につながっている。学校給食は教育活動であり、給食指導は他の教科教育と同様に、教育理論の上に成立するものでなければならぬ。そのために必要なのが、どのような実践でどのように教育効果が達成されるのかを検討する、教育実践研究である。

(ウ) 食べ手であり、学び手である子どもの気持ちに立脚した検討がなされてきたとは言えない。

これまでの給食研究における最大の問題は、この3点目にある。外山（2000）は子どもとの観

察を通じて、子どもが食事場面に對して持つ、大人では想定しにくい新たな意味「友人とのやりとりの場としてもつ」^{*19}ことを発見した。しかし、このような子ども側から見えてくる給食の事実、学校給食における「子どもの自然」を探求した研究はまだ少ない。子どもの自然を探求する、つまり、学校給食においても子どもの視点に立った事実を探る研究がなされなければならない。

これら3つの問題の所在をふまえ、「学ぶこと」だけでなく「食べること」でもある学校給食において、子どもの学びを大切に考え、学校給食の教育的意義は何であるかを論じたい。なお、本研究では小学校の給食を中心に扱う。

3 本書の構成

前述の論点を踏まえた本書のねらいは、1970～1980年代にかけて実施された1つの小学校の「給食教育」に着目し、それがどのような実践で、卒業生にどのような学びがあったのかを丁寧に掘り下げることで、今後の給食の議論に一石を投じることである。議論の例を挙げると、食を通じた教育を行うとき、それは子どもたちを傷つけるシステムになっていないか？ 本来伝えたいことと矛盾しない給食システム、教育体制になっているか？ 食を通じた教育として

の意義は十分に果たされていると言えるか？ といったことである。そして、学校給食や教育の議論、及び今の大人である自分たちの振る舞いが、子どもの幸せ、子ども自身の未来と未来社会の幸せをどこまでとらえたものになっているのか、そういった議論のきっかけにしたい。

本書の構成は次の通りである。第Ⅰ部では、学校給食を教育として位置付けた日本の歩みがどのようなものであったかを振り返る。ここでは、第Ⅱ部で扱う「給食教育」がどのような時代において行われたものなのか、その前提や背景をおさえておきたい。「食育」という言葉そのものが一般的でなかっただけでなく、給食の内容も違い、栄養教諭もいなかった時代がある。第Ⅰ章で給食の歴史、第Ⅱ章で給食・食教育に関する用語、第Ⅲ章で給食の位置付けと変遷に関して論じた後、第Ⅳ章において本研究で扱う学校給食と「子どもの学び」とは何かを述べる。

第Ⅱ部では、本研究の主たる結果を論じる。第Ⅴ章から第Ⅷ章において1976～1987年の京都府旧久美浜町川上小学校における給食教育の実践がどのようなものであったかを紹介し、第Ⅸ章と第Ⅹ章において当時小学生だった卒業生が給食を通じてどのような学びを得たかを明らかにする。終章では、本研究から得られた知見をまとめる。なお、第Ⅰ章は2022年出版^{*20}の論文を元に構成している。

- * 1 野末多・Kyungryul Jun・石原洋子・武田安子・永井成美・由田克士・石田裕美(2010)「小学5年生の学校給食のある日とならぶ日の食事摂取量と食事区分別の比較」*栄養學雜誌* 68(5) 598-608頁。
- * 2 Yamaguchi, M., Kondo, N., Hashimoto, H. (2018). Universal school lunch programme closes a socioeconomic gap in fruit and vegetable intakes among school children in Japan. *Eur J Public Health*, 28(4), 636-641.
- * 3 Horikawa, C., Murayama, N., Ishida, H., Yamamoto, T., Hazano, S., Nakanishi, A., Arai, Y., Nozue, M., Yoshioka, Y., Saito, S., Abe, A. (2020). Nutrient adequacy of Japanese schoolchildren on days with and without a school lunch by household income. *Food & nutrition Research*, 11, 64.
- * 4 United Nations International Children's Emergency Fund (UNICEF). (2019, October). The state of the world's children 2019 Children, *food and nutrition*, 48-49.
https://www.unicef.org/reports/state-of-worlds-children-2019 (取得日2023年12月22日)
- * 5 Morimoto, K., Miyahara, K. (2018). Nutritional Management Implemented at School Lunch Programs in Japan Based on the Changes in Criteria for Provision of School Lunches. *The Japanese Journal of Nutrition and Dietetics*, 76, Issue Supplement, S23-S37.
- * 6 2019年当時、ユニセフ本部栄養部門上席アドバイザーのローランド・クンバカ氏は、日本の学校給食が子どもたちの健康に寄与している可能性に触れた。
https://www.unicef.or.jp/news/2019/0143.html (取得日2023年12月22日)
- * 7 文部科学省(2019)「食に関する指導の手引——第二次改訂版(H31)」225-227頁。
https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/syokuiku/1292952.htm (取得日2023年12月22日)
- * 8 和井田結佳子・河村美穂(2020)「学校給食に関わる教育活動の研究レビュー」*日本家政学会誌* 71(9) 585頁。
筆者らは2020年のレビュー論文において、学習者側が給食から何を学んでいるのか等を詳細に調べた研究がないことを指摘した。
- * 9 高澤光・小林真(2019)「小学校における給食指導の問題点——事例研究と調査研究に基づく小学校での食育に関する提言——」*富山大学人間発達科学部紀要*, Vol. 14, No. 1, 11-22頁。
- * 10 新村洋史編著(1983)「食と人間形成——教育としての学校給食」*青木書店*, 224頁。
- * 11 註7に同じ, 223頁。
- * 12 註7に同じ, 223-225頁。
- * 13 鈴木洋子(2017)「教員養成系大学における教育実習事前指導等での給食指導の扱い」*奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要*, Vol. 3, 203-207頁。
- * 14 原千尋・河村美穂(2014)「小学校低学年における給食指導の特徴」*教育科学*、埼玉大学紀要、教育学部、Vol. 63, No. 1, 47-57頁。
- * 15 新保みさ・福岡景奈・赤松利恵(2017)「小学校における学級担任による給食指導——栄養教諭・学校栄養職員と相談している教員の特徴——」*日本健康教育学会誌*, Vol. 25, No. 1, 12-20頁。
- * 16 和井田結佳子・小林瑠衣・河村美穂(2021)「給食指導の実態及び小学校教員の意識調査——埼玉県Q市における質問紙調査から——」*日本家政学会誌*, 72(10) 673-685頁。
- * 17 註10に同じ。
- * 18 註9に同じ。
- * 19 外山紀子(2000)「幼稚園の食事場面における子どもたちのやりとり——社会的意味の検討——」*教育心理学研究* 48(2) 192-202頁。
- * 20 Wada, Y., Kawamura, M. (2022). Japanese school lunch and food education -130-year history and educational significance. "School Food, Equity and Social Justice -Critical Reflections and Perspectives", Routledge, 169 - 184.